

群馬の巨大前方後円墳の秘密

～そのカギはヤマト王権にあった～

高松中学校1年3組

氏名 島袋 琥太郎

1. はじめに（研究のテーマ）

今回、僕が現地調査をした保渡田八幡塚古墳は、墳丘長100mあり、その盛土の量は14500m³にもなる巨大な前方後円墳だ。表面を覆う葺石に使われた川原石の数は、39万8000個にもなるそうだ。これほどの巨大な建造物を古墳時代の人々が作る大変さは、想像しただけで逃げ出したくなるほどの苦行のように思える。それにもかかわらず、3世紀半ばから7世紀末にかけて、古墳は日本全国に約16万基以上、コンビニの約3倍にもものぼる数が作られている。中でも群馬県は「古墳大国」と呼ばれるほど、たくさんの古墳や埴輪が作られている。

・なぜヤマト王権はこんなにも巨大なお墓を全国各地に作り続け、ムラビトは(苦役に耐え)暴動も起こせずせつせと造営に協力したのだろうか。

・前方後円墳はヤマト王権の許可制でしか作れなかったのはなぜか。

・どうして群馬にこれほど多くの巨大古墳や埴輪が作られたのか。

以上の疑問を知るために、自分なりに調べてみたいと思う。

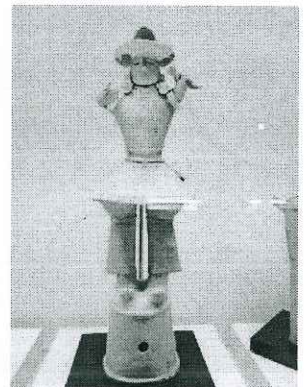
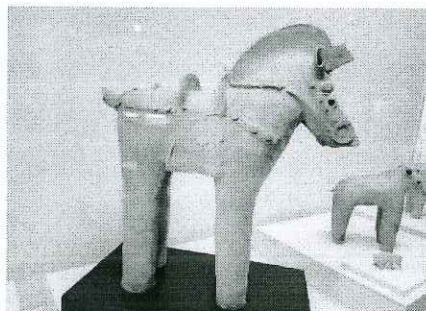
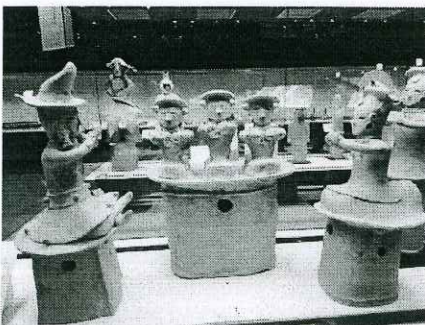
2. 研究の動機

東国文化のレポートを書くにあたり、古墳や埴輪について一体何から調べてよいのか何処へ行けばよいのかさっぱりわからなかった。とりあえず、近くの古墳を見に行ってみよう！と思い、保渡田八幡塚古墳を見に行くことにした。

そこで、ラッキーなことにボランティアの方に古墳の説明を受けることができた。当時を復元した古墳を実際に自分の足で踏みしめながら聞いた説明の中に、おもしろいエピソードが2つあった。「古墳の表面を覆う葺石は、担当ごとに区分けして行った作業であったんだけど、その中に、ここみたいに結構適当に石をならべられている箇所があるでしょ？これは、古墳作りが強制労働として行われていたものではないからなんですよ」と説明してくれた。僕だったら、こんな重労働に自ら参加しようなんて絶対に思わない。自ら協力する理由は何だろう？それって何のため？

そしてもう1つは、「前方後円墳を作るには、ヤマト王権の許可が必要だった」という点である。許可をもらわないと作っちゃいけないお墓って、なぜ？ヤマト王権ってそんなに偉かったのだろうか？

これらの疑問を出発点として、僕は少しでも東国文化の秘密にたどりつけるのだろうか。



3. 調査方法

(1) 高崎の代表的な古墳を現地調査してみる

- ・ 渡田古墳群
- ・ 綿貫観音山古墳

(2) 博物館などに行き、展示物などから学ぶ

- ・ 群馬県立歴史博物館
- ・ かみつけの里博物館

(3) 参考文献を調べる

- ・ 大和朝廷について
- ・ 群馬の古墳時代の歴史について



4. 文献・資料から分かったこと(考察)

(1) なぜ古墳はつくられたのか

- ・ ヤマト王権が列島を支配するシステムの象徴として古墳は作られた

古墳時代は弥生時代と異なり、争いの少ない平和で国際交流の豊かな時代であったようだ。それはなぜだろうか。

古墳は誰にでも簡単に作れるものではない。大量の労働者、資金、巨大な古墳を作るための高度な技術力、それらを行うための強大な権力と指導力を持ったリーダーが必要不可欠である。つまり、古墳が作れるということは相当な権力者であり、驚異的な武力・財力を持っているという証でもある。そんな権力者にわざわざ戦いをしかけるなんて愚かのきわみである。それゆえ、古墳の存在によって平和がもたらされていたと言えるのではないだろうか。

ヤマト政権は、古墳を作るための高度な技術力をベースに、大陸の進んだ文化・技術を提供することによって、バラバラだった全国各地の有力豪族との連合政権を構築してゆくのである。設計図を共有する古墳や貴重な大陸の国際色豊かな副葬品が、群馬をはじめとした全国に多数存在しているのがその証拠である。

したがって、古墳はただのバカでかい権力者のお墓などではなく、軍事的・宗教的・政治経済的な象徴として存在したのだ。そのため、ヤマト政権に選ばれし豪族しか前方後円墳は作らせてもらえず、その大陸の進んだ技術や文化による経済的発展を享受できなかったのである。前方後円墳を許可制にしたのはこのためだ。しかも、情報を教えるだけでなく同時に大陸から地方へ技術者の派遣も行い、各地の豪族が巨大な古墳を作れるようになるために、技術的・経済的発展の後押しをしたようだ。

このようにして、古墳によって物流や人の交流がおこり、全国交通網が整備されてゆき、ヤマト政権のネットワークが出来上がっていったのだ。

・ムラビトが古墳作りに協力的であったその理由

ムラビトたちは権力者のために嫌々働かされたのではないという話を聞いた時、とても意外であった。むしろ、協力的に古墳作りに参加していたようだ。

古墳作りは当時の農業を生業とする民の生活と深い結びつきがあった。自然や災害に翻弄される当時の生活は、自ずと目に見えない神を作り出し恐れ敬う対象が必要であった。王は農業に必要不可欠な治水工事の技術を用い集団に富をもたらし、神々を祭ることで地域に心の安寧をもたらした。古墳作りはその2つが合体した「王と民の祭り」のような位置づけであったのではないか。

その理由は、埋葬品に祭祀用のものが多い点や古墳自体に儀式的な要素が強いことからうかがえる。保渡田八幡塚古墳に置かれている埴輪群像は、様々な儀式のようすを表しているという。「古墳にねむる王が、①農業に欠かせない水を操り、まつりを行う人であること、②山にも、川にも、王の力がおよんでいたこと、③鉄や馬などの最先端技術による財産をたくさんもっていたこと、などを伝えようとしていることがわかる」（わくわく博物館体験ブックより引用）とある。こうした様子から、ムラビトたちは、自分たちにも利をもたらす公共事業の一環のようなものとして古墳造りに参加していたのだろうか。

・古墳が突然作られなくなった理由

この時代に機能していた「古墳」という統治システムが徐々に機能しなくなった(古墳ブームの終焉)時期と、新たな統治システムとして「仏教」が登場した時期とちょうど重なっている点は、とても面白い。ヤマト王権は古墳から仏教へとシステムを変えたのである。この点は、古墳時代最後の7世紀後半に作られた群馬県の宝塔山古墳が仏教建築の要素を取り入れた古墳であることから興味深い。

こうした古墳ネットワークでつながった政治経済上の基盤が出来上がっていたことにより、中央集権という律令国家の支配へと、混乱なくスムーズに変換することが出来たのだろう。

(2)なぜ古墳は巨大化したのか

・古墳の大きさを豪族間の序列を表すために、ヤマト王権の許可制としていた

当時、大きな古墳が作れるほど、力のある豪族であった。

ヤマト王権の中心だった大阪の大仙古墳が墳長486mと、日本最大の古墳である。群馬県最大の古墳である太田天神山古墳は墳長210m、古墳時代全体を通した大きさでは全国28位であるが、同時期に作られた古墳で比べると、全国2位になるという。当時の群馬の地位の高さを示しているエピソードだ。

・巨大な防衛装置としての役割があったから

大きな古墳を作ることでその豪族が持つ権力や武力をしめし、争いを抑制する効果があった。

(3) 群馬で古墳がたくさん作られた理由

- 水田耕作に非常に適した地域であったため、古墳作りのための財源に困らなかった
- 日本列島をつなぐ交通の要地に位置していたから
- ヤマト王権との強い繋がりにより、大陸からの先進技術が享受できたため
- 馬文化(乗馬と生産)の重要拠点となれたから

「渡来人とともに群馬に持ち込まれた治水・冶金・馬生産という技術によって、広大な榛名山麓は開発され、古代における国内有数の経済用地に成長を遂げていった」(高崎千年物語より引用)とある。つまり、古墳作りに欠かせない経済的基盤・地理的条件・ヤマト王権との強いコネクション・独自の強み(馬の生産)がそろっていたため、多くの有力な王を輩出できた。特に馬を育てるのに適した場所だと認められ、生産を任されたことが大きい。それは群馬の古墳から馬の埴輪が大量に出土されていることからよくわかる。当時の馬の存在価値は、まさにエネルギー革命のような存在だった。「馬の効用は①騎馬による軍事行動、②迅速な情報伝達、③物資の大量輸送、④農地の効率的な耕運、⑤権威のみせつけ、など多岐にわたる」(高崎千年物語より引用)とある。まさに誰もがうらやむ最先端の先進産業だったのである。

(4) 群馬で埴輪がたくさんつくられた理由

- 渡来人の招致により手工業(金属加工や窯業等)が発達し、大量の埴輪を作る技術者集団が存在していた
- 藤岡や太田など数か所に埴輪専門の窯が作られ、埴輪の大量生産を行えたから

5. 現地調査から感じたこと(考察)

(1) 保渡田古墳群(八幡塚古墳・二子山古墳・薬師塚古墳)

5世紀後半から6世紀初め(古墳時代中期から後期はじめ)に造られた。西毛地域を代表する支配者の墓と考えられている。3基もの100m級の大型前方後円墳が隣接しているため、とても珍しく貴重な古墳群だ。最初に井出二子山古墳が造られ、次に保渡田八幡塚古墳、最後に保渡田薬師塚古墳が造られた。6世紀前半、2度の榛名山二ツ岳の大噴火の際、土石流により埋まってしまう。現在は公園として整備され、当時の古墳の状態が再現されている。54体物人物や動物の埴輪で当時の埴輪劇場も再現。

とにかく、萱石で古墳外周を覆われた古墳そのものの美しさと、ストーリー性のある埴輪の展示に圧巻される。今回、現地で多くの物語を感じることができた古墳である。中央部分にある石室と石棺も見ることができ。また機会をつくって再訪してみたい古墳だ。

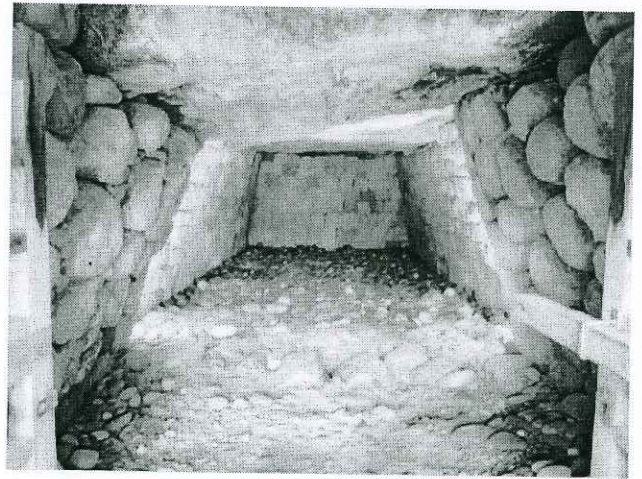


(2)かみつけの里博物館

保渡田古墳群と隣接する施設で、上記の古墳から出土された埴輪や埋葬品の展示を見ることが出来る。模型などの展示も多く、5世紀ごろの高崎の古墳社会を知ることができる。

(3)綿貫観音山古墳

6世紀後半(古墳時代後期)に築かれた、100m級の大型の前方後円墳。現在の古墳の状況は芝生に覆われたシンプルな作りながら、県内一大きいといわれる「玄室」を見ることが出来る。非常に高度な技術で石を加工し、積み上げられた横穴式石室は、1500年前に造られたものとは到底思えない。写真で見ると、やはり実物を現地で見られることの尊さを感じる場所であった。前方後円墳の上ののぼると赤城山がよく見渡せ、少し古代の人々の気持ちを感じることができた。



(4)群馬県立歴史博物館

何といっても特筆すべき点は、群馬全土から集められた、レプリカではなく本物の国宝の貴重な多種多様なデザインの埴輪や副葬品が、多数展示されているところだ。写真も撮ることができる。古墳時代だけではなく、群馬県の歴史や文化を映像や模型など最新の技術で分かりやすく展示・解説がされている。とにかく展示物のボリュームがある。1度ではすべて見きれないほどだ。併設の施設でワークショップ行っており、埴輪や古墳デザインのおみやげを購入できる売店もあった。



6.

まとめ(感想)

今回のレポート作成にあたり、実際に現地へ行き・古墳を見学し・博物館の展示を間近で見て・資料を探して読む、という行動をすることによって、今までただのそこらへんにある森や小高い丘や公園、という程度の認識で通り過ぎてしまっていた近所の古墳が、リアリティをもった歴史として感じられるようになった。自分でも驚きである。学習の楽しさってこういうものなのかもしれない、とわずかながら感じる事ができた。自らが興味を持ったことを深掘りすると、芋ずる式にいろんな発見ができ、理解が深まった。自分なりに群馬の歴史文化を勉強する良い機会になったと思う。

今回初めて東国文化を学んでみて、群馬の名前の由来や、群馬がどれほどヤマト王権から重要視された地域であったのかを知ることができた。大陸の最新技術や情報を自分たちが優位にたてるようにうまく利用・伝達することによって、日本各地で独立していた周りの豪族たちを、武力を用いず緩やかに自分たちの支配下へとまとめ上げていく過程は、ヤマト王権にはものすごい策士がいたのだなあ、と思わずにいられない。だって、お互いwin winの戦略に感じるからだ。埴輪や古墳の一見なぜかほのぼのとした平和的なフォルムに隠された、戦略的な交渉術を、いったいどれだけの人がきづいていたのだろうか。

群馬県には、今回見きれなかった古墳や史跡がまだまだたくさんある。また機会があれば、群馬の歴史をもう少し深掘りしてゆくのもおもしろいかもしれない。

◎参考文献

- わくわく博物館体験ブック
- 八幡塚古墳セルフガイド
- 東国文化副読本～古代群馬を探検しよう～ 2022年度版
- 古墳時代Ⅰ【古墳】 群馬の遺跡4
- 高崎千年物語